

絶滅危惧種ヤツガタケキンポウゲの生息域内保全： 防鹿柵による緊急的な保護対策の実施



尾関雅章



長野県環境保全研究所 自然環境部 生物多様性班

背景と目的

- ヤツガタケキンポウゲ *Ranunculus yatsugatakensis* Honda et Kumaz. は、本州中部山岳の八ヶ岳の固有種で高山草原に生育 (Figure 1)
- 環境省レッドリスト (2020), 長野県版レッドリスト (2014) とともに絶滅危惧IA類 (CR), 特定第一種国内希少野生動植物種 (2020年2月)
- 自生個体の絶滅を緊急的に防ぐとともに、今後の保護増殖事業計画の策定に必要となる知見等を集積するため、**生物多様性保全推進支援事業 (2021~2023年度)** を活用し、本種の分布・生態に関する調査研究ならびに自生地のニホンジカの生息動向に関する調査研究を実施するとともに緊急的な保護対策を実施



Figure 1: ヤツガタケキンポウゲ *Ranunculus yatsugatakensis* Honda et Kumaz.

残存集団・個体の確認

- 本種の既知の生育地・集団は八ヶ岳の2ヶ所・3集団
- ドローンも利用して本種の残存集団・個体を確認した結果、**残存集団は1ヶ所・3集団 (既知の生育地で小規模な新たな集団を確認)**
- 3集団はそれぞれ地上部と岩壁に分かれており、開花個体数は計約180 (地上部：約60個体, 岩壁上：約120個体)

生育地周辺のニホンジカ生息状況と採食圧

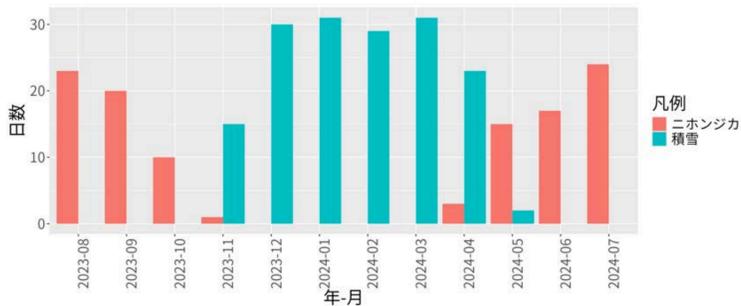


Figure 2: カメラトラップ調査によるヤツガタケキンポウゲ生育地周辺のニホンジカ出没日数と積雪日数.



Figure 3: 自生地で見られたニホンジカ糞 (左), ヤツガタケキンポウゲの採食痕 (中) とニホンジカ忌避植物のバイケイソウの採食痕 (右).

- カメラトラップ調査でニホンジカの高頻度の出現を確認 (Figure 2)
- 地上部の群落ではニホンジカ採食による存続危険性が極めて高い状況 (Figure 3)**

防鹿柵による緊急的な保護対策の実施

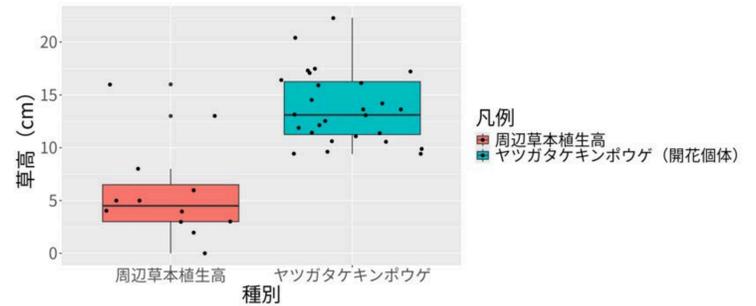


Figure 4: ヤツガタケキンポウゲの草丈と周辺群落高.

- 本種の草丈ならびに周辺植生の群落高が20cm以下と低い (Figure 4)
- 3集団は数10m離れて点在しており、生育地全体を囲むには延長距離200m超の柵が必要
- 自生地は急傾斜地で資材運搬や柵設置後のメンテナンスが困難



- 大規模恒久柵や電気柵ではなく軽量資材を用いた小型防鹿柵による保護が適当と判断し、地上部の群落で生育密度の高い地点を**“点的”に保護する小型防鹿柵** (幅2m×奥行2m×高さ0.7m) を各集団に設置 (Figure 5)

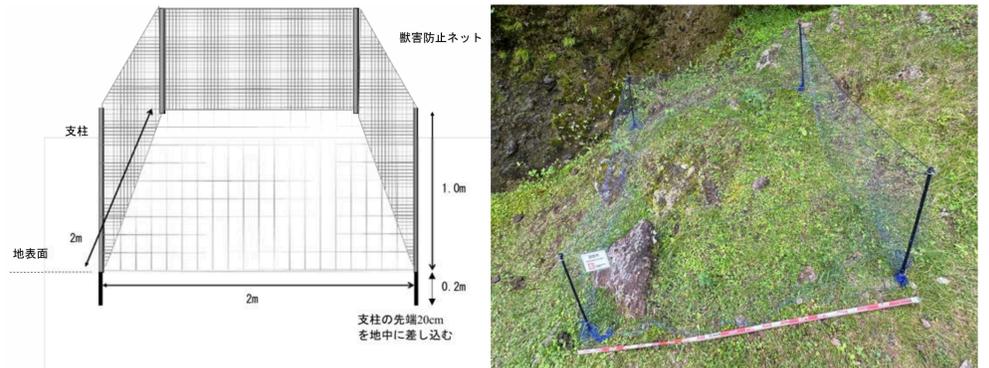


Figure 5: ヤツガタケキンポウゲ自生地に設置した小型防鹿柵. 仕様 (左) と設置状況 (右). 支柱は、電気柵支柱樹脂ポール14型 (中空構造) 900mm, ネットは防鳥ネット.

防鹿柵による保護対策の効果

Table 1: 生物多様性保全推進支援事業 (2021~2023年度) の経過

	目標値 (目標年次)	事業1年目 (2021年度)	事業2年目 (2022年度)	事業3年目 (2023年度)
ヤツガタケキンポウゲの集団数	1集団 (2023年度)	1	1	3
ヤツガタケキンポウゲ生息域内保護 (防鹿柵内) 開花個体数	約75個体 (2023年度)	0	10	15
ヤツガタケキンポウゲ開花個体数	約200個体 (2023年度)	100	100	180

- 軽量資材でも柵の破損等はなく、柵内で開花・結実する個体数が増加

今後の取組

- 防鹿柵設置数の増加・設置期間の長期化 (無積雪期を通じて)
- 緊急的な保護対策は実施されたものの、残存個体数が非常に少ないことから、植物園等での生息域外保全の検討
- ヤツガタケキンポウゲの自生地には他の八ヶ岳特有の高山植物も同所的に生育していることから、本種を含む一帯の高山植物の長期的な保護対策に向けて関係機関と連携